



信じてくれる存在



『記憶』という映画があります。犯罪を犯し少年院に送られた少女たちに話を聞き、出所後の姿まで追うドキュメンタリーです。

ある女子少年院で、少女から質問を受けた。

「幸せになっていいんですか」少女は幸せになってはいけないと思っていた。

こんな私は幸せになってはいけない、なれるわけがない、と。また、ある少女は養父を刺してしまったという。どうして？ と聞くと、もう我慢ができなかったと。彼女はそれまでずっと性的虐待を受けてきたのだ。

こんな世の中、クソだと思った。自分で環境を選ぶことのできない子どもが、自分を守るために、生きるために犯罪を選ぶしかなかったのだ。これまでに彼女たちが育った環境には、虐待、ネグレクト(育児・養育放棄)のほかに、放任ではなく放置に近い環境が多いという現実を知った。

『女子少年院の少女たち』(さくら舎) 中村すえこ 著より

映画の監督は、15歳でレディース(暴走族)の総長になり、自身も女子少年院に入った経験のある中村すえこさん。自分が立ち直れた経験から「人は変わる、社会は変わる」と信じ、今も多くの少年たちが犯罪行為に“追い込まれている”現実を伝えたいと、映画を製作しました。

今の日本は“失敗の許されない社会”だと中村さんは言います。枠に収まらない子、道からそれた子の存在は許されず、人々の意識から意図的に消されていく社会。

それは、大人にとっても生きづらい社会なのではないでしょうか？

「嫌なことがあったらすぐ逃げちゃうので…」

そう佳奈はいうが、逃げずに闘いつづけることもむずかしいことだと私は思う。

逃げだしたくなることなんて山ほどあって、そんなときに、寄り添ってくれる人がいる環境が必要なんだ。安心できる場所があるということは生きていくために大事なこと。佳奈にはそういう居場所がなかったのかと思うと、胸が締めつけられる思いだった。…

私は2度目の逮捕をされたとき、もう一度人生を生き直したいと思った。それは、自分のことを思っていてくれる母の気持ちを知ったことと、信じてくれる大人の存在があったからだった。
信じてくれる大人がいるということは、自分の存在を受け入れてくれることだと感じた。

宗教では、神や仏を「信じる」ことから始まるとよく言われます。しかし**浄土真宗の阿弥陀さまは、私たちが「信じる」より先に、「あなたが救われていくことは間違いないよ」と、信じてくださっている仏さまです。**私たちの存在を受け入れてくれる仏さまだからこそ、安心できる居場所ができ、つらい人生を歩みきることができるのです。

阿弥陀さまをいただく私たちは、出所後の少年に「あなたを信じているよ」と声をかけられるのでしょうか？ 私自身に問いかけられている気がします。

